

あなたの脚 大丈夫ですか

vol.4

放っておくと怖い下肢静脈瘤

合併症―最悪の場合、命の危険も

下肢静脈瘤の一般的な症状は、脚のだるさやむくみ、こむら返りなどです。脚の静脈が蛇行してこぶこぶと太く盛り上がり、見た目が気になりスカートがはけない、温泉に入るのも恥ずかしいといった外見上の問題も症状の一つといえるでしょう。しかし、仕方のないことあきらめて放置しておくと、重症化することがあります。

多くは内くるぶし辺りの皮膚がただれる「皮膚潰瘍」を生じることあります(写真)。これは、なかなか治らない「難治性皮膚潰瘍」となることが多いです。

下肢静脈瘤があると、脚に静脈血がたまる「うっ血」が起こります。そして、その「うっ血」を長期間放っておくと、細胞の老廃物が静脈から周囲の組織に漏れ出て皮膚に不都合なことが起こってきます。「静脈」うっ滞性皮膚炎「から湿疹やかゆみを生じます。また、血液中から血球の色素成分が染み出すことによる「色素沈着」も起こります。

下肢静脈瘤は皮膚に近い静脈の拡張ですが、時として血液のよごみから血栓(血の塊)をつくることがあります。往々にして炎症を伴い、「急性」静脈瘤に沿って赤くなり熱を伴ったり、痛みを伴ったりしてきます。これが「血栓性静脈炎」の状態です。その部位を冷やしたり、痛み止めの薬を服用したりして様子を見ますが、それでも痛みが強いときには血栓除去術(小さく皮膚を切り血栓を絞り出す)を行うこともあります。この血栓性静脈炎は、静脈瘤の経過の中で繰り返して起こる場合もあります。

血栓性静脈炎は、表在静脈に起こっているだけならば命に関わるような状態ではありません。もちろん、下肢超音波検査で血栓の範囲や深部静脈の状態をくまなく観察しますが、くまれに、血栓が深部静脈に向かって進展している場合があります。これが下肢静脈瘤の最も怖い合併症の「深部静脈血栓症」です。

下肢静脈瘤自体、深部静脈血栓症の弱い危険因子と言われていますが、下肢静脈瘤患者の5%前後に深部静脈血栓症を合併しているとされています。

さらに進展した場合、血栓が血流に乗って肺動脈に詰まる「肺動脈血栓塞栓症」(いわゆる「エコノミークラス症候群」)を発症し、最悪の場合死に至ることもあります。しかし、深部静脈血栓症の危険があるからという理由だけで、下肢静脈瘤の治療を行わなければならないということにはなりません。

さらに進展すると、皮膚や皮下脂肪組織の「線維化」という変化が起こります。皮膚は肥厚して硬くなり、熱を伴ったり腫れあがったりして痛みを伴う「脂肪皮膚硬化症」や「蜂窩織炎」を起します。こうなると、むしろ静脈瘤は目立たなくなってきました。また、皮膚の循環障害から、



さらに進展すると、皮膚や皮下脂肪組織の「線維化」という変化が起こります。皮膚は肥厚して硬くなり、熱を伴ったり腫れあがったりして痛みを伴う「脂肪皮膚硬化症」や「蜂窩織炎」を起します。こうなると、むしろ静脈瘤は目立たなくなってきました。また、皮膚の循環障害から、

下肢静脈瘤を有している方は、専門医療機関を受診して下肢超音波検査を受けることをお勧めします。

1986年愛媛大学医学部卒。岡山大学第二外科、屋島総合病院外科を経て2007年に医療法人社団仁会会社クリニック(高松市林町)開設。下肢静脈瘤日帰り治療、末梢動脈疾患など血管外科を中心に診療。医学博士。外科専門医、循環器専門医。

辻クリニック院長 辻 和宏